

「恐れるな、語り続けよ」 一使徒行伝講解説教 40-

使徒行伝 18章 1節～11節

説教 本庄侑子 牧師

今日は長寿者祝福聖餐礼拝です。今日のために説教箇所を特別に選ぶつもりでしたが、祈りの内に使徒行伝の講解説教を続けることがふさわしいと思うに至りました。

使徒行伝第18章に入りました。今いるのはコリントです。パウロは、召しに応える中で、人々に拒絶されることもあれば、続々と洗礼を受ける者も与えられました。他の町にいた時よりも順調だったかもしれません。しかし、後の手紙でパウロは語っています。この時、自分の内に恐れや弱さ、不安を抱えていたと。

ある夜のこと、主はパウロに語られます。「恐れるな。」(9節b～10節)主は、パウロが黙ってしまいたくなるほどに恐れを抱いていたことをご存知でした。どんな恐れだったか、色々考えられます。召しに応える中で心や体にたくさんの傷を受けてきました。経験が深まることで傷も深まり、足が前に進まなくなっていたかもしれません。

また、パウロは病や「とげ」と呼ぶものも抱えていました。心や身体に刺さったまま、生活や体力を蝕むのです。今は順調に見えても、いつ、また辛い思いになるのかと不安になります。このとげさえ無ければ、神様と人にもっと尽くせるのに、と心に影を落としたかもしれません。

このパウロに主は「あなたには、私がついている」(10節)と語りかけられました。聖書全体を通して語られる「私はあなたと共にいる。」と同じ言葉です。アブラハムも、モーセもヨシュアもそうでした。天にあげられる直前、イエス様の最後の肉声もそうでした。神様に用いられる人に、恐れはつきものです。主の約束の言葉を聴き続けなければ生きていけません。「あなたには、わたしがついている」。パウロもこの言葉によって立ち上がる力をいただきました。

主はさらに、パウロの使命へと目を開かせます。「語りつづけよ、黙っているな。」(9節)「この町には、わたしの民が大ぜいいる。」(10節)パウロが今、この状態で、この場所に生きている意味と目的を主が握ってくださる。そう知って、パウロは1年6か月、同じ場所で語り続けることができました。

私たちが生きている限り、神様の意味と目的があります。私たちの周りに、あなたからの言葉を通して、主イエスへと導かれようとしている人たちがいるのです。確かに、若い時のよう

にいかないこともあるでしょう。しかし、それは無力になったことを意味しません。ご長寿の方々の語られる言葉には重さがあります。祈りの中に、温かさと力があり、心に迫ってきます。私もご長寿の方々とのお交わりを通して、教会を愛し、仕えたいという献身の思いがどれほど深められてきたことでしょうか。祈り手となり、支え手となり、労をねぎらう言葉をかける。それらは確かに教会を立て、伝道を進める力です

また、礼拝に集うことが昔のようになくなって、その場所で用いられ続ける姿をたくさん見てきました。日常の仕事から解放されて、祈りに徹することができるようになったと、病床でこそ、教会のため、家族のため、世界のため、祈りに徹する兄弟姉妹がおられます。祈りにおいて、全世界に遣わされている。病は兄弟姉妹を閉じ込めることはできないのです。

確かに、老いが深まると神様のことも分からなくなるかもしれません。しかし、神様がその命に責任をもって用い続けられる様を見てきました。病院や施設の方々が、その方がキリスト者であることを知って、かつて自分もイエス様に触れたことを思い出し、教会への憧れを抱き直すきっかけとなります。ご家族が居合わせて、礼拝を共にすることもあります。

「私たちは年月を恐れる必要はない、なぜなら、年月は私たちを死に近づけるのではなく、神と私たちの愛する者へと近づけるからだ。」(ウイリアム・パークレー)

老いは、神様が人生の晩年に与えてくださる恵みの時だと思えます。私自身、祖父母の老いを目の当たりにし、関わる時間が増えています。老いを深め、力が取られていく祖父母を前に、私からもいらぬ力が抜けていき、もう一度、祖父母と出会い直し、手を握って、言葉を交わし直したいとの思いをいただいています。

モーセが人生最大の使命を与えられたのは80歳の時でした。年月は、私たちを神と愛する者たちに近づけます。いよいよ、これからです。「恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついている。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる。」

(記 説教要約奉仕者)